



世代を超えて浮かぶのは 銅板に刻んだ心の景色

profile
作家名：石井千晶。昭和22年10月24日生まれ。広島県出身。岩屋地区在住。インスタグラムでも作品を公開中。

Spotlight

スポットライト

銅版画家
白井 千晶さん

洞爺湖を見下ろす岩屋地区の高台に、ドーム状の屋根をいたたくギャラリーがあります。中の白壁に飾られているのは銅版画。移ろいゆく自然や心に湧いた想念は銅板に刻まれた心象風景となつて、銅版画家白井さんの記憶を物語っています。故郷の広島で絵画の基礎を

学んだ白井さんは京都府内の大学に入学、本格的に美術の道を進み始めました。大学紛争が絶えない時代、構内には個性的な学生が多く、前衛的な表現を追求する人も少なくありませんでした。

白井さんが出会ったのが銅版画。ニードルで描線を刻んだ銅板を専用の液体に浸けて腐食させる「エッチング」などの技法が特徴です。線にはインクが入り込み、紙面に転写すると独特の質感を生み出します。作家が意図しない表現につながることもあり、白井さんは「偶然性に惹かれたのかもしれない」と話します。

大学卒業後、広島で教師をしながら京都で個展を開くなど作家活動を始め、札幌に移住後の1988年には全道展で最高賞を受賞。ダウン症の娘・愛さんのため、環境を変えようと旧洞爺村に居を移してから創作に打ち込みました。緻密な色彩を描く愛さんの絵画も関心を集め、親子で二人展を開くなど活動を続ける傍ら、白井さんは札幌の社

会福祉法人が行う絵画教室の講師も担当。20年以上経つ今も継続し、芸術の魅力を教えています。

そんな白井さんですが、町内で作品を披露する機会はありませんでした。眠っていた作品に光を当てたのは洞爺の若い住民たち。アトリエに遊びに来た際に作品に感銘を受け、洞爺湖芸術館での個展を企画。展示のアイデアを練り、作品を飾る壁やチラシを自作するなど協力を惜しまず、昨年11月に秋特別展「風の記憶」を実現しました。

町内で初の個展は盛況となり、1カ月以上の会期中、白井さんも来場者を歓待。絵の教え子との再会もあり「会場にいないと会えない人ばかりでした。50年分の回顧展になりました」と笑います。

久しぶりの個展は多くの記憶を残してくれました。「銅版画に興味を持ってくれた人に教えられたらいいと思います。若い人たちがつながっていけたら」と、新たな景色を心に思い描いています。

東奔西走

昨秋、行われた銅版画家白井千晶さんの個展。開催前に芸術館に伺うと、手作りの巨大ボード(!)に作品を飾る地元の方々の姿が。芸術がつくるのは目に見える物だけではないことを教わった気がしました。(D.Y)

日差しが温かくなり、ようやく春の足音が聞こえてきました。青々とした緑に色づく洞爺湖の景色やこれから開催されるイベントの数々。今からとても楽しみです。新生活をスタートした皆さんも、体に気をつけてお過ごしください。(Y.A)

町公式LINEを友だち追加!

イベントや防災など様々な情報に加え、フルカラー版広報紙もご覧いただけます!

